



あなたが継ぐ使命
ともに紡ぐ未来

防衛省

〒162-8801
東京都新宿区市谷本村町5-1
TEL.03-3268-3111 (代表)

採用情報はこちらへ

防衛省採用WEBサイト

<https://www.mod.go.jp/j/saiyou/>



言葉、文化、そして想い。
古い世代から新しい世代へ受け継がれることで
歴史は巡り、紡がれてきました。
そしていま、歴史に新たな1ページを記しはじめたみなさん。
これからどんな未来を描こうとしていますか。
その未来で、あなたの家族や友人、見知らぬ誰かの
何気ない日常は守られていますか。

防衛省は、国家の平和と独立を守り、国の安全を保つという
崇高な使命を担っています。
そして、この使命を果たすためのアプローチは時とともに
移ろうものです。
しかし、いつの時代も防衛省の仕事の幹を支えるのは、
未来に対する職員一人ひとりの揺るぎない覚悟と
強い責任感です。

変化の著しい国際情勢、進化し続ける技術、
交錯する多様な価値観。
この時代に、傍観者ではなく当事者として、
私たちの使命を継ぐ“あなた”が必要です。

あなたの知性と情熱、そして高い志が、
「誰かを守る」力になる。
その舞台が防衛省です。
その道は決して平坦ではありません。
しかし、私たちは決して一人ではありません。
ともに歩み、ともに紡ぐ未来へ。

あなたの未来への一歩を、
心より歓迎いたします。

防衛事務次官 大和 太郎



CONTENTS

02-03 防衛事務次官メッセージ／目次
04-05 組織図・任務

06-07 **私たちの使命**

職員対談

08-09 特集1
「豪州への次期汎用フリゲート移転」
10-11 特集2
「陸上自衛隊佐賀駐屯地開設」

12-13 **私たちの責務**

職員インタビュー

14-15 Mission 01 「防衛政策の立案」
16-17 Mission 02 「自衛隊の運用」
18-19 Mission 03 「国際協力」
20-21 Mission 04 「防衛力整備」
22-23 Mission 05 「地域社会との協力」
24-25 Mission 06 「人的基盤の強化」
26-27 Mission 07 「装備政策の展開」

28-29 施設系／装備系技官の役割

30-31 施設系技官の紹介

32-33 装備系技官の紹介

広がりのあるキャリアパス

34-35 キャリアパス・
世界で活躍する職員からのメッセージ

36-37 **私たちが働く環境**

38-39 特集3
「様々な働き方でいきいきと働く
ロールモデルの紹介」

40-41 若手職員アンケート

42 ワークライフバランスを支える制度、
採用実績

43 採用担当からのメッセージ

組織図 任務

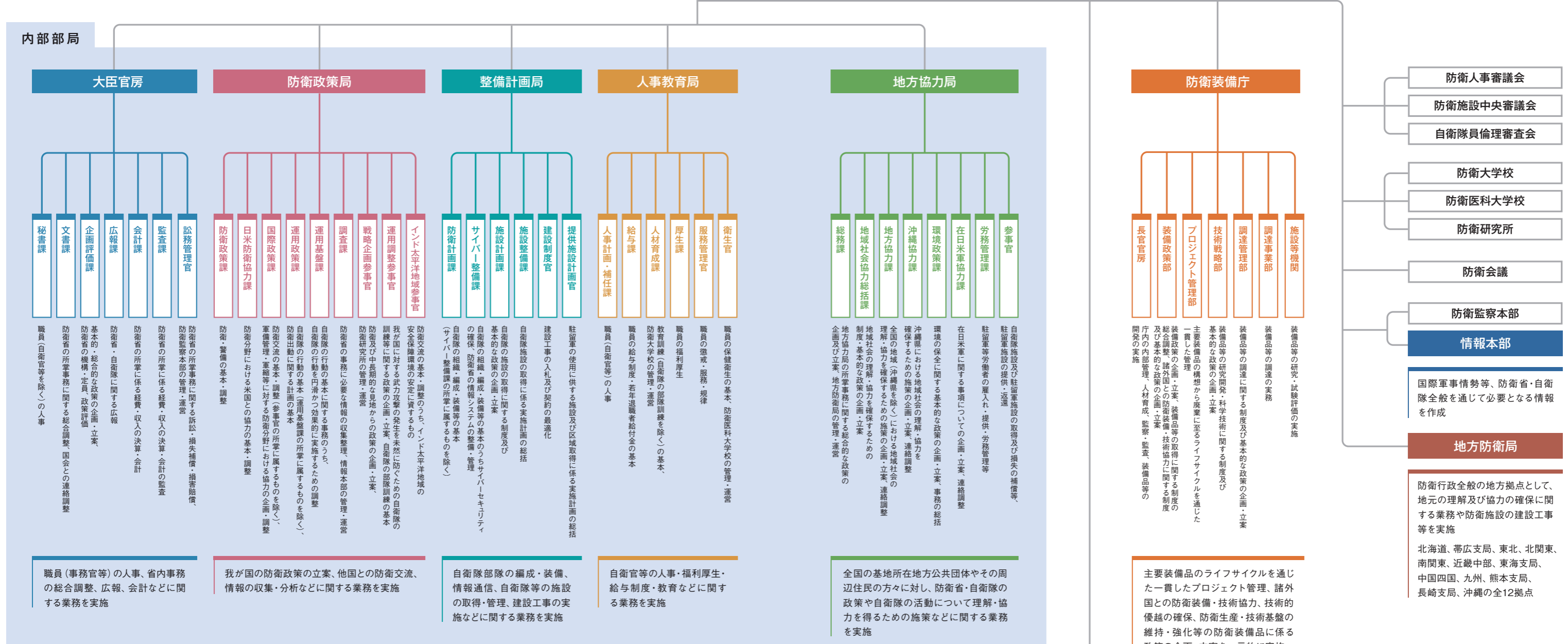
Organization & Mission

安全保障環境を踏まえ、先進的な防衛政策を立案し、それを部隊編成、基盤整備、人事、地元自治体からの協力確保、諸外国との連携などに反映させていく各局局。これらが有機的に結び付き、相互に緊密に連携を取りながら役割を果たすことで、防衛省は安全保障という大きな責任を果たしています。



総合職募集 Website

総合職事務系、総合職施設系、総合職整備系以外の各職種の採用情報は、防衛省ホームページをご覧ください。



国家公務員採用試験	総合職	試験区分	
		事務系	技術系
防衛省専門職員採用試験	一般職	【本省内部部局採用】	全区分
		施設系【本省内部部局採用】	理工系・農業系の全区分、教養
		装備系【本省内部部局採用】	理工系・農業系の全区分
	研究職	研究開発系等【防衛装備庁等採用】	
	専門職	【試験区分】	英語、中国語、朝鮮語、ロシア語、フランス語、アラビア語、ヘルシヤ語、インドネシア語等
		【採用機関】	本省内部部局、情報本部、陸上自衛隊、海上自衛隊、航空自衛隊、地方防衛局、防衛装備庁

※採用機関によって採用する言語（試験区分）は異なります。

防衛事務官とは

「安全保障」という国家存立の根幹を担う防衛省。世界各国との安全保障協力、国際平和協力活動、大災害への対応、陸・海・空だけでなく、宇宙・サイバー・電磁波といった新たな領域においても求められる安全保障の取組など、防衛省が必要とされるフィールドは多岐にわたります。「我が国の平和と独立を守り、国の安全を保つ」という使命のもと、日々新たな課題に対応しています。

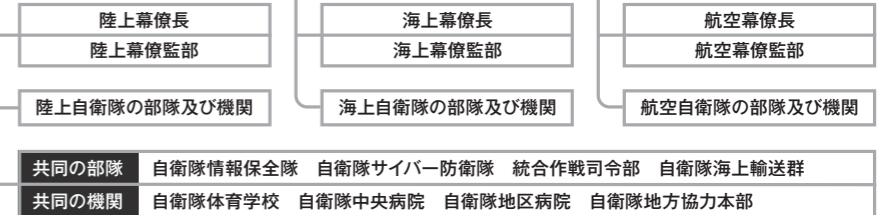
防衛技官とは

防衛省は、我が国の平和と独立、安全を守り抜く最後の砦。ほかの誰にも代えがたいその任務を担う者の中に、理系の専門性を活かし防衛行政に携わる職員、「防衛技官」がいます。防衛技官は、自衛隊の飛行場・港湾・駐屯地といった「防衛施設」の整備や戦車・護衛艦・戦闘機等といった「防衛装備品」の取得、関連する政策の企画・立案を主な任務とし、日々新たな課題に対応しています。

統合幕僚監部

首席参事官・参事官

実際の部隊運用に関する業務を、対外説明や関係省庁との連絡調整を含め一元的に実施



(2026年1月時点)

本組織図は組織の特徴等を表現するため、防衛省の組織全てを精緻に表したものではありません。

私たちの使命

「我が国の平和と独立を守り、国の安全を保つ」

私たちの使命は、他のどんな組織にも代わりはできない唯一無二の使命です。

国際情勢の著しい変化や技術の進歩を受け、我が国の安全保障環境をめぐる課題は多方面にわたりますが、私たちは知力と情熱を持って課題に挑み、使命を共有する25万人

の仲間とともに日々邁進しています。その中でも2025年に特に大きな動きがあった2つのプロジェクトにクローズアップして、次ページ以降特集という形でご紹介します。

豪州への次期汎用フリゲート移転が決定。

2025年8月5日、豪州政府が日本の新型「もがみ」型護衛艦を次期汎用フリゲートとして選定したことを発表しました。

日本と豪州の防衛連携強化に資する、重要なプロジェクトが大きな一歩を踏み出しました。特集では本プロジェクトに携わる3名の職員による座談会の様子をご紹介します。職種や立場が異なる3名の、チームワークとそれぞれの活躍に注目です。



特集① 座談会 豪州への次期汎用フリゲート移転
P08-09 国際社会における日本の防衛装備品の存在感を高めていく。

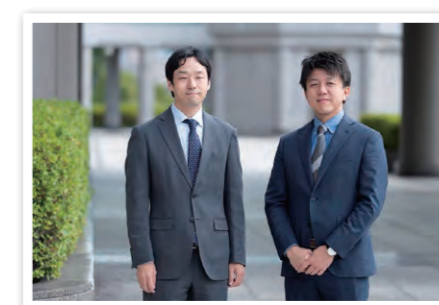
陸上自衛隊佐賀駐屯地の開設。

2025年7月9日、新規に開設した佐賀駐屯地にV-22オスプレイ1号機が着陸しました。

喫緊の課題である島嶼防衛能力の構築のために、優れた航続性能を持つV-22オスプレイを佐賀県に配備するというプロジェクトが大きな節目を迎えました。

この日を迎えるまでに実に多くの困難があり、多くの職員がその英知と情熱を結集して乗り越えてきた軌跡があります。

特集では佐賀駐屯地の建設工事に携わった技術系職員と、プロジェクトが円滑に進むように多岐にわたる調整に尽力した事務系職員の2名による対談を掲載します。



特集② 対談 陸上自衛隊佐賀駐屯地開設
P10-11 屈指の難事業を成功させたものは何だったのか。



豪州への次期汎用フリゲート移転を通じ、国際社会における日本の防衛装備品の存在感を高めていく。

2025年8月5日、豪州政府が日本の「もがみ」型護衛艦の能力向上型を次期汎用フリゲートとして選定したことを発表しました。戦後最も厳しく複雑な安全保障環境の中、日本と豪州両国の防衛協力を飛躍的に深化させる歴史的なプロジェクトに携わった3人の職員が、その思いを語りました。

——今回の次期汎用フリゲート移転の取り組みについて、改めてその経緯と意義について教えてください。

職員A 2014年、「防衛装備移転三原則」が閣議決定されて以来、我が国は防衛装備品の移転を積極的に推進してきましたが、新規完成品の移転についてはフィリピンへの警戒管制レーダー1件にとどまっていた。今回、豪州政府が次期汎用フリゲートの調達計画を発表し、日本をはじめとする4カ国の中から、日本の「もがみ」型護衛艦の能力向上型の採用が正式に決定しました。
職員B 防衛装備品の移転は同盟国・同志国等との安全保障・防衛分野における協力の深化や国内の防衛生産・技術基盤の維持・強化、ひいては我が国の安全保障にも資する重要な取り組みです。国内外に与えるインパクトは非常に大きく、絶対に成功させるとの意気込みのもと、官民一体となって豪州政府への働きかけを行いました。

職員C 豪州では従来イギリス海軍のフリゲートをベースに開発計画が進められていましたが、中国の海洋進出など安全保障環境の変化があったことから、より迅速かつ確実に戦力化できる艦艇の導入が求められていました。

職員B 4カ国の競合を経て最終的に日本とドイツの2カ国に絞られるという厳しい戦いでしたが、ステルス性を備えていること、従来艦に比べて少人数運用が可能であること、豪州が希望する納期に間に合わせるができることなどが決め手となって、日本の「もがみ」型護衛艦の能力向上型が選定されました。2024年の初頭から約1年半かけて絞り込まれていったわけで

すが、要するに“日本という国”そのものへの信頼も決定の大きな要因になったのではないかと感じています。

職員C 技術的な検討にあたっては、豪州側のニーズにしっかり耳を傾けながら、日本側の意図を丁寧に説明しました。技術的な強みもさることながら、対話と理解を通じて信頼関係を築いていったことが選定に寄与したと自負しています。

職員A 選定結果が発表される時期は2025年中とだけ言われていたため、8月に選定されたと聞いたときは意外に早く決まったなという驚きもありました。もちろん官民一体となった働きかけが奏功した喜びは大きかったですが、一方で次の段階である契約に向けて、身の引き締まる思いもありました。

——今回のプロジェクトにおける皆さんの担当業務と、印象的だったエピソードを教えてください。

職員A 私は2025年初頭にキャンベラの日本大使館に派遣され、日本の「もがみ」が選定されるべく、現地で豪州側への働きかけに従事しました。いわば日本側の“セールスマン”の立場です。現地では、現職の政府関係者や軍OBの企業関係者、ジャーナリスト、ロビイスト、コンサルタントといった方々が混然一体となって小さなコミュニティを形成しており、誰かが得た新しい情報が一瞬にして全員に伝わっていくような空気感がありました。メディアに「日本よりドイツの提案が優れている」というような記事が出ることもあり、それに対して日本側として「いや、日本の「もがみ」は素

晴らしい」と関係者にアピールして回ることもよくありました。

職員B Aさんがキャンベラでそのように奮闘されていたことを知り、改めて感謝の思いを強くしています。私はその間、価格等についての豪州側との協議や、それに伴う国内の企業との調整を担当しました。また、装備移転を成功させるには関係省庁及び関係企業と連携しオールジャパンの態勢で協力することが不可欠ですので、協力体制構築の検討も担当しました。これほど大規模な防衛装備品の移転は日本として初めてであるため、企業の声に耳を傾け、官民の二人三脚で取り組むことを強く意識しました。

職員C 私は次期汎用フリゲートに搭載予定の装備品の性能や仕様に関する技術的な検討を行い、豪州側が装備品を正しく理解し、移転後に適切に運用できるよう支援しました。また、米国政府を通じて防衛装備品を取得する制度を活用するに際し、米国側との技術情報の共有ややり合わせを担当



防衛装備庁 装備政策部 国際装備課 課長補佐

職員A

2014年入省／事務系



防衛装備庁 プロジェクト管理部 事業監理官（艦船担当）付 豪州次期汎用フリゲート移転推進室 専門官

職員B

2020年入省／技術系（装備系）

しました。いわば日米豪3カ国間の技術的な調整役です。

職員A キャンベラ滞在中は、果たして日本が選定されるのか、そもそもいつまで働きかけをすることになるのか、先が見えない中での取り組みでしたので不安はありました。しかし、自分の行動や言葉の一つひとつが、防衛装備品の海外への本格的な移転に向けた突破口になるとの信念は揺らぎませんでした。シングルイシューでの派遣であり、通常の業務とは異なるような没入感があったことを思い出します。

職員B 私も何度か豪州政府と対面で協議を行いました。朝から日が落ちるまで議論を重ね、その後は市ヶ谷で次の日に向けた内部検討といったスケジュールでした。とてもハードな日々であったものの、顔を突き合わせて課題の一つひとつを解決するにつれ手応えは大きくなっていき、豪州側の要望や想いに全力で応えたいと感じました。

職員C Bさん同様、私も豪州側と対話を

重ねて話をまとめていったことが印象に残っています。例えば、ある装備品の搭載タイミングなどについて、議論になることもありましたが、その際も丁寧に説明を重ね、納得できる形に仕様をまとめ上げることができました。信頼関係を築くことができた瞬間の手応えは、大きな喜びでした。単なる防衛装備品の移転にとどまらず、豪州との戦略的連携を深め、地域の安全保障に最前線で貢献するスケールの大きなプロジェクトに直接参画できたことに、深い意義を感じています。

——プロジェクトの今後の展開と、皆さんご自身のビジョンについて教えてください。

職員A 「防衛装備移転三原則」が閣議決定された2014年は私が防衛省に入省した年でもあり、社会人人生の歩みと重なるプロジェクトであることを感慨深く受け止めています。今回、採用が決まったのは全11隻で、まずは3隻を日本で建造して2029年に



海上幕僚監部 装備計画部 艦船・武器課（誘導武器班員）

職員C

2005年入省／海上自衛隊

1隻目を豪州に納入する見通しです。
職員C 今回の取り組みは日豪の安全保障協力を深めるとともに、日本の防衛産業の将来にも大きな影響を与えると確信しています。日本の技術力の国際的な認知を高めることにも通じると期待しています。

職員B Cさんのおっしゃる通りで、国際社会に日本の防衛産業の高い技術力を示すとともに、国際的な平和や安全保障への貢献に対する我が国の積極的な姿勢を改めて世界に示すきっかけになることは間違いありません。装備移転に加えて、我が国の技術力の向上やリスクの分散にも資する装備品の共同研究・共同開発をさらに積極的に推進していくことも重要だと考えています。
職員A 防衛省というのは、日本で唯一無二の国防組織です。私はこの組織で働くことが間違いなく日本の国益に直結すると考え、入省を決意しました。今回得られた装備移転の経験を、防衛政策や自衛隊の運用、インテリジェンスといった他の分野においても活かしていきたいと考えています。

職員B 今回、過去に例のない規模の防衛装備品の移転プロジェクトに携わったことで、この経験を活かしてさらなる移転に貢献したいと考えています。防衛装備品の移転には様々な制度や、技術面でも幅広い知見が求められるため、それらに磨きをかけていくつもりです。

職員C 私は海上自衛隊に憧れ、自分も艦艇に乗って国防に携わりたいと考えて自衛隊に入隊しました。今後は現場と政策をつなぐ橋渡し役として、日々の任務を通じて得た経験や課題意識を防衛装備品の改善や制度設計に活かしていきたいと考えています。

陸上自衛隊佐賀駐屯地の開設。 稀に見る難事業を完遂させたものは 何だったのか。

2025年7月9日、佐賀空港西側に開設された佐賀駐屯地に、千葉・木更津駐屯地から飛来した最初のV-22オスプレイが着陸しました。その姿を見つめるものたちの胸に去来したのは、強い意思のもとで難工事を乗り切った誇り。南西地域の防衛力強化につながる新たな駐屯地の開設を可能にした、不屈の挑戦を振り返ります。

——島嶼防衛能力の強化という重要な使命のもとで誕生した佐賀駐屯地ですが、開設に向けての取り組みは稀に見る難工事となりました。

職員D 佐賀駐屯地の開設は、広大な土地に、約11万㎡の駐機場、佐賀空港の滑走路に接続する2本の誘導路、3棟の格納庫、隊庁舎、燃料タンクなど多数の施設を新たに整備するという、非常にスケールの大きなプロジェクトでした。背景には喫緊の課題である島嶼防衛能力を構築することに加え、陸上自衛隊のV-22オスプレイの能力を最大限に発揮するために近在の水陸機動団と一体的に運用可能にすることがありました。当時、V-22オスプレイは千葉県の本木更津駐屯地に暫定的に配備され、その期間は2025年7月までとされていました。そのため、用地を取得した2023年5月からの約2年間という極めて短い期間に駐屯地を開設する必要がありました。現場と近傍は日本有数の軟弱地盤であることに加え、有名な海苔の養殖地でもあることから、水質への配慮のために海苔漁期間中の約7カ月間はコンクリートを打設できないという制約もありました。インフラ工事において工期の半分以上でコンクリートが打てないというのは、通常では考えられない厳しさです。施設系の職員として駐屯地開設に携われるのは大変に名誉なことではありますが、同時に必ず成し遂げなければならないという大きな責任を感じました。

職員E 私は装備品の整備や部隊編成を担当する防衛計画課の陸上自衛隊の担当班長として、V-22オスプレイの円滑な移駐や移



当時：九州防衛局 調達部土木課長

職員D

2011年入省／技術系（施設系）

駐後の有効な運用に向けた調整等に取り組みました。着任したのは佐賀駐屯地の工事が始まった2023年6月の1カ月後の7月でした。この事業は、防衛省から佐賀県にV-22オスプレイの配備をお願いした2014年7月から始まった、11年にもわたる事業であり、これまで多くの先輩方が地元のご理解等を得るために、粘り強く取り組んできました。その重みを感じながら、我が国防衛の喫緊の課題である南西地域の防衛体制強化に必要な不可欠なこの事業を、しっかりと成就させたいという思いで取り組みました。

——約2年という極めて短い期間で開設までこぎ着けるために、どのような取り組みをされたのでしょうか。

職員D 特に注力したのが、ECI（Early Contractor Involvement）方式を適用することでした。ECI方式は、計画・設計の早い段階から施工者のノウハウを設計に反映

させる発注方式のことで、通常の設計後に施工事業者を選定する流れに比べて、工期短縮やコスト削減などの大きなメリットがあります。施工中に設計修正を強いられる、いわゆる“手戻り”の懸念も少なく済みます。ECIは防衛省としては初の適用となるため、他省庁における事例も参考にしつつ、準備に取り組みました。設計・施工いずれの品質も担保しつつ最速で進めることが可能という点で、初めてのことであったものの、絶対に成功させてやるという気持ちでした。

職員E DさんからECI方式のお話を伺い、改めて大変な難工事だったことを認識しました。新たな手法に挑戦したことで、迅速な施設整備を実現できたんですね。

職員D 海苔漁期間中にコンクリートが打設できない点については、工場で生産されたコンクリート板を現場で組み立てる「PRC工法」を採用することで対応しました。当初、1年のうち7カ月もコンクリートが打てないと聞いたときには絶望しましたが、「PRC工法」ならば道が開けるのではと考え、採用しました。不可能と思えたことも、施工者からの意見なども踏まえて検討することで可能になりました。

職員E 地元の皆様への配慮にも十分に手を尽くされましたね。

職員D そうですね、造成工事には約80万㎡の土砂が必要で、それを運ぶ工事用車両などに対する地元の皆様の不安は大きかったと思います。そこでご自宅を訪問してご意見を伺ったり、小学校の近くには交通誘導員を手配したり、騒音計や振動計による測定を実施しホームページ上で公表したりといった対策を行いました。一つひとつは

地味な取り組みでしたが、目に見える形で真摯に対応することを心がけました。

職員E そうした厳しい条件の中で無事に工事を終えた後は、実際に運用する部隊にバトンが託されます。駐屯地開設後の輸送航空隊の運用の構想や、駐屯地開設が近く中での輸送航空隊の本木更津駐屯地からの移駐の要領などについて、陸上幕僚監部や地元調整を担う九州防衛局等の方々と日々熱心に議論して方向性を検討しました。

職員D 今、Eさんがバトンとおっしゃいましたが、まさに長い間、歴代の職員がバトンをつないできたからこそ予定どおりに開設できたことは間違いありません。私もそのバトンを確実に部隊に渡したいとの思いで取り組みました。また、非常に関係者の多い事業であるにも関わらず迅速な意思決定ができた背景には、防衛省全体が同じ方向を目指し、心を一つに取り組んだことが挙げられると思います。短い工期や軟弱地盤といった困難を克服できたのも、そうした一体感があったからこそでしょう。

職員E 工事が完了したのは2025年6月30日です。その日は、どのような思いで迎えましたか。

職員D まず、期限に間に合ったということで心から安堵しました。やり終えた達成感是非常に大きかったです。我々の造り上げた駐屯地を自衛官が歩いている姿には、やはり感動しました。施設系の技官として、これほどのスケールのものづくりに携われたことは本当に誇らしかったです。同時に、それまで工事現場だったものが駐屯地に様変わりして手を離れていったことは少し寂しく、誇らしさと寂しさが同時に湧いてき



当時：整備計画局 防衛計画課 業務計画第1班長

職員E

2013年入省／事務系

たというのが率直な思いでした。

職員E 私は7月9日に最初のV-22オスプレイが飛来したときのことが印象に残っています。機影を見ながら、やっとここまで来たという思いがこみあげてきました。残りの機体についても、整備状況や天候などに配慮しながら順次移駐が行われ、8月中旬に移駐がすべて完了したときはほっとしました。

——今後の展開についてどのようにお考えでしょうか。また、今回の事業を通じて学んだことは何でしたか。

職員E 佐賀駐屯地の開設記念行事の際、中谷防衛大臣（当時）は「佐賀を愛し、佐賀に愛される駐屯地を目指してほしい」と訓示で述べられました。その言葉どおり、地元の皆様を含む国民の期待に応えられる駐屯地になってほしいと考えています。V-22オスプレイの優れた機動性は、部隊の

島嶼部への機動展開能力を高めるだけでなく、災害への対応や急患輸送といった任務を果たす上でも非常に有益です。佐賀駐屯地は南西防衛の中核を担う拠点の一つとして重要であると同時に、地域の皆様の安心につながる存在になると思います。

職員D 同感です。防衛省・自衛隊には災害対処への期待が大きいのも事実です。V-22オスプレイはその機動性などから、災害対応においても、地元の方々の期待に応えられる存在になるに違いありません。また、佐賀駐屯地の開設は我が国の防衛体制の強化に不可欠の施策であり、その点を地元の皆さんにご理解いただくことが極めて重要でした。今後も目まぐるしく変化する安全保障環境に臨機応変に対応していく必要がありますが、円滑に施策を進めるためにも、地元の方々の不安を解消し、ご理解を得ていくための不断の取り組みが重要と考えています。

職員E 佐賀駐屯地の開設は、佐賀県、佐賀市、V-22オスプレイを暫定配備させていただいた本木更津市といった関係自治体の皆様との間で積み重ねてきた信頼に支えられています。こうした約束や期待を裏切らず、誠実に対応を進めることの重要性を、改めて確認できた事業となりました。

職員D 本事業の事業費は約2,000億円です。このような金額規模の工事を約2年で実施する醍醐味は、防衛省の事業ならではの思いでした。こうした大きな事業においても、困難な目的を達成するためには柔軟な発想や先進的な取り組みを躊躇なく採用し、勇気をもって対処していくことが重要であると学びました。

私たちの責務

日本の平和を紡ぐため、政策を有機的に連関させ、様々なMissionに挑んでいます。



使命感を胸に英知を結集し、我が国の防衛政策を立案

刻一刻と変わる国際情勢を踏まえ、自衛隊が国際社会で果たすべき役割や将来を見据えた中長期的な戦略など、様々な角度から議論を行い、防衛政策の企画・立案を行います。

MISSION 01 P14-15

日本を守るための情報を収集、分析する

中長期に至るまで安全保障環境のトレンドを把握し、事態の兆候がある場合には速やかに察知できるように、隙のない総合的な情報収集・分析を行います。

MISSION 01 P14-15

二国間、多国間で進める防衛協力

同盟国・同志国との連携を強化し、多角的・多層的な防衛協力や交流を戦略的に推進します。

MISSION 03 P18-19

戦略的な装備政策の展開

防衛生産・技術基盤の強化、新たな外交ツールとしての諸外国との防衛装備・技術協力の推進や、装備調達最適化など、自由な発想と多角的な視野で装備政策を企画立案し、実施します。

MISSION 07 P26-27

自衛隊の活動を支える防衛力の整備

戦い方の様相が大きく変化する中、新しい戦い方に対応できるかどうかが今後の防衛力を構築する上で大きな課題です。航空侵攻・海上侵攻・着上陸侵攻といった伝統的なものに加えて、精密打撃能力が向上したミサイルによる大規模な攻撃、情報戦を含むハイブリッド戦の展開、宇宙・サイバー・電磁波の領域や無人アセットを用いた非対称的な攻撃等を組み合わせた新しい戦い方が顕在化しています。こうした新しい戦い方に対応していくために、自衛隊に必要な「人」や「モノ」、自衛隊の体制を整備します。

MISSION 04 P20-21

国を守るすべての自衛隊員、そしてそのご家族のために

防衛力の中核たる自衛隊員一人ひとりが、任務に邁進できる環境を作り上げ、組織のパフォーマンスを最大化するため、自衛官の処遇、生活・勤務環境の改善、新たな生涯設計の確立等、家族支援を含めた各種施策に、隊員やその家族の声に耳を傾けつつ取り組んでいます。

MISSION 06 P24-25

様々な事態に対応し、国民の生活を守る

弾道ミサイルの飛来や国内での大規模な災害などの様々な事態に対し、部隊の活動を円滑に遂行するための枠組みを整備します。

MISSION 02 P16-17

自衛隊や在日米軍の安定的な運用のために

多種多様な施策を実施し、国民や地域社会の理解と協力を得るための地道な努力を積み重ねることで、自衛隊や在日米軍の円滑な運用を可能にします。

MISSION 05 P22-23

Keyword

我が国の安全保障政策の立案、防衛力の一層の強化、情報収集・分析、情報の正確な発信、インテリジェンス機能の強化



防衛政策局 防衛政策課
係員

2025年入省／技術系（装備系）

保障にも波及しかねません。また、自らが携わっている業務は新聞やテレビ等のメディアで報道され、SNSでも多くの反応が示される分野です。社会的責任の重さとともに非常にやりがいのある仕事に関わっていることを自覚し、誇りを持って取り組んでいます。

日本の素晴らしさを再認識した経験が原点に

中学時代に米国で暮らしたことによって日本の素晴らしさを再認識できた経験は、私にとって職業選択における根幹となりました。日本の良さを維持するためには国力向上が必須です。私は、装備品を通じた防衛生産・技術基盤の強化や同盟国・同志国等との関係強化など多面的な国力向上に関わることができる業務に魅力を感じ、装備系技官を志望しました。ぜひ皆さんもこれまでの人生を振り返り、根幹となる実体験を大切に就職活動に臨んでください。



迅速かつ正確な 対外説明を担う

私たちは激変する国際情勢のただなかにあります。いかなる事態においても国民を守り抜くには安全保障環境の変化に不断に対応していく必要があります。そのためには正確な情勢認識が欠かせません。戦略情報分析室ではこうした情勢に関する情報の収集・分析を行っており、政府が政策決定を行うにあたって必要な情報を提供しているほか、政策の前提となる情勢認識を国民に分かりやすく説明する責務も負っています。その中で私は、北朝鮮担当として日夜奔走しています。

主な業務の一つがミサイル対応です。ミサイル発射時には、政府一丸となって対応しますが、戦略情報分析室は主に防衛省の対外説明の役割を担っています。私は、それまでに得られた情報をもとに大臣会見の発言要領を作成するほか、国会議員にも自ら説明していきます。極めて短時間での作業を求められることも多くプレッシャーも

防衛政策局 調査課 戦略情報分析室
防衛部員

2020年入省／事務系

ありますが、それ以上に、日本の安全保障に携わっているという強い実感を得られます。また、情勢認識を国民に伝える『防衛白書』の執筆も重要です。北朝鮮の核・ミサイル開発の状況や日本の安全保障に与える影響を深く分析した上で、分かりやすく伝えられるよう試行錯誤を重ねています。

国民の平和な暮らしのために 尽力したい

東日本大震災での経験が、私の職業選択に大きな影響を与えました。学生時代、私は宮城県で被災し、それまでの当たり前の日常が一瞬で失われる経験をしました。以来、いざというときに国民の命や平和な暮らしのために尽力できるような立場にありたいと意識するようになり、それが防衛省への入省という決断につながっています。

防衛省には実に幅広い業務があり、そのどれもが日本の安全保障に直結しています。この国の未来のために働きたいという強い思いを持つ方なら、防衛省を選択して後悔することはないはずです。

安全保障環境の変化をとらえ
情勢認識を
分かりやすく国民に伝える

防衛力強化に向けて
迅速かつ確実に
調整を進めていく

防衛政策の 企画立案と総合調整

私が所属する防衛政策課は、厳しい安全保障環境の中で我が国の平和と独立を守るため、防衛政策の企画立案とその実現に向けた総合調整を行っています。これまで我が国の防衛力強化の基本方針などを定めた戦略3文書策定や統合作戦司令部の新編といった改革に際して省全体のとりまとめを担ってきました。現在は戦略3文書に定めた防衛力の一層の強化を着実に推進するとともに、加速度的に変化する安全保障環境を踏まえた戦略3文書の改定に係る検討に取り掛かっています。

その中でも、私が所属する企画第1班は、今後の我が国における防衛力強化の方向性や課題についての検討を実際に推し進めていく役割を担っており、私はこの検討に関する会議の資料の作成、準備、事後のSNS発信等の広報などを担当しています。

私の業務が停滞することは、課の業務が停滞することであり、ひいては日本の安全



Keyword

警戒監視活動、弾道ミサイル等の経空脅威への対応、国民保護、在外邦人等の保護・輸送、大規模災害への対応、自衛隊の運用に係る総合調整

統合幕僚監部 首席参事官付
総括班長

2021年入省(経験者採用)/事務系



1分1秒を争う際も 迅速かつ的確な判断を下す

統合幕僚監部 首席参事官付は、自衛隊の部隊運用に関して政策的見地からの調整や対外説明を担っています。我が国周辺における警戒監視や対領空侵犯措置のほか、海外における国際緊急援助隊の派遣や在外邦人等輸送といった自衛隊のオペレーションをタイムリーかつ的確に実行できるよう下支えする組織です。私は総括班長として、国会答弁や会見対応等に責任を持つとともに、実際に事案が発生した際には速やかに登庁して対処に当たります。緊急連絡用の携帯電話が手放せない日々ですが、事態対処の面で首相官邸や防衛大臣の意思決定を直接支える、緊張感とやりがいのある仕事です。

時には1分1秒を争う状況下で対処に当たります。例えば北朝鮮による弾道ミサイル発射時には、速やかに省内外の関係各所に必要な情報を届け、政府全体が迅速に対応できる状況を確認します。また、国民の皆様にとどのようなお知らせをするのか、防衛大臣や官房長官、時には総理からどのよ



うなメッセージを発信してもらうのか、極めて短時間のうちに調整します。

こうした対応を各分野を担当する専門官等が迅速・適切に支えています。また、統合幕僚監部内の一部門ということで周囲には多くの自衛官がいます。このような多様なメンバーがワンチームとなって事態対処に当たっています。

国の安全に 直接貢献できる充実感

危機管理の領域で社会の役に立つこと、具体的に実務で貢献することが私の職業選択の軸です。前職ではコンサルタントとして民間企業や大規模イベントの危機管理に関するプロジェクトに従事していましたが、より国の安全に直接関わる仕事がしたいという思いから防衛省に転職しました。民間時代に学んだ知見を活かしつつ、国の政策の最前線で責任ある業務に携わる日々は非常に充実しています。志を持って挑戦したい、社会の根幹を支える仕事に携わりたいという方は、ぜひ防衛省というフィールドでその志を実現してみませんか。

緊急時における
自衛隊のオペレーションを
ワンチームとして支える

自衛隊の円滑な実運用のため
連絡役としての責任のもと
関係各所との調整に当たる

現場と政策側の 両方に携わる醍醐味

統合幕僚監部 首席参事官付は、「現場」と「市ヶ谷」の潤滑油のような部署です。ミッションは国内外における自衛隊の実運用が円滑かつ効果的に進むよう、関係各所との調整や対外説明を実施することです。総括担当として私が携わっているのは、課内外にかけての総合調整を担い、関係各所とのやり取りを行うことです。1年目でも連絡役として各所との調整に直接的に関わることが多く、刺激的であると同時に責任も大きいため緊張感を持って日々励んでいます。

印象的だったのは、2025年6月に太平洋上で発生した自衛隊機への中国機による特異な接近事案への対処にて、担当者がぎりぎりまで現場との間で事実関係の確認作業などをしながら公表内容を作成し、その直後には自分たちが報道室などと調整して記者会見の準備をしたことです。事案に対処する現場とのやり取りと対外公表を担う



報道室とのやり取りが1つの部署の中で行われており、まさしく現場と政策側の両方に携わる統幕首席参事官付らしさを実感したと同時に、自分も調整役としてその前線に立っていることを認識した経験でした。

建築の専門性を自衛隊施設の 整備に活かしたい

親族に自衛官経験者がいたことで、私にとって“自衛隊”は昔からとても身近であり、特に自衛隊の処遇改善については問題意識を持ち続けていました。大学で建築学を専攻していたため建築に関わる仕事をしたいと考えていたところ、防衛省の施設系技官ならば自衛隊施設の環境改善等に建築の知見を活かして中心的に関わることができると知り、自分の関心と専門の両方を満たせることに魅力を感じて入省しました。

就職活動では「自分のやりたいこと」「なぜそれをやりたいのか」という2つをしっかりと整理することが重要です。この2つを軸に様々な選択肢を検討して、後悔のない仕事選びをしてください。



統合幕僚監部 首席参事官付
係員

2025年入省/技術系(施設系)

我が国にとって望ましい安全保障環境実現のため同志国との連携を進める

二国間・多国間での防衛協力・交流に取り組む

国際協力は安全保障・防衛分野でも当たり前のことになってきています。このような中、我が国の防衛のために望ましい安全保障環境をつくるために英国や豪州などの同志国と連携を進めること、これが私の所属する国際政策課のミッションです。具体的には、「自由で開かれたインド太平洋」というビジョンを実現するために、様々なツール（防衛相会談、共同訓練、防衛装備・技術協力等）を使って、二国間・多国間での防衛協力・交流に取り組んでいます。私は課内業務を総括する先任部員として案件の全般的な進捗管理やマネジメント、対外的にはプレスからの問い合わせ対応なども行っています。

印象的だったのは、2025年の英空母「プリンス・オブ・ウェールズ」を旗艦とする英空母打撃群の日本への寄港です。これは「自由で開かれたインド太平洋」の実現を目指し、地域の平和と安定に貢献するという英国のインド太平洋地域へのコミットメントを示すもので、日本寄港中に英国国防



大臣が訪日し、総理表敬や日英防衛相会談等も実施しました。こういった訪日プログラムを組むのか、何を話し合うのかなど膨大な事前準備・調整が必要で、一筋縄でいかないこともありましたが、担当班を中心に課一丸となったことで成功裏に終えることができ、日英防衛協力の一層の強化への貢献を実感しました。

マクロの視点で安全保障・防衛面に貢献したい

私は学生時代に国際政治理論のゼミに所属するなど、安全保障分野に対して強い関心を抱いていました。前職の地方自治体では米軍基地関係の部署を経験し、マクロの視点から安全保障・防衛面で貢献したいと考えるようになって防衛省に転職しました。そしていま、「自由で開かれたインド太平洋」というまさにマクロな視点のもと、政策の舵取りを担っています。

我が国の安全保障・防衛と聞いて自然と体が反応してしまう。そういった方は自分の直感を信じて、是非防衛省で一緒に働いてみませんか。

防衛政策局 国際政策課
先任部員

2020年入省（経験者採用）／事務系



防衛装備庁 装備政策部 国際装備課
係員

2024年入省／技術系（装備系）

防衛装備品や日本の技術力に対する誇りを胸に

国際装備課は諸外国との防衛装備・技術協力の推進を所掌とし、防衛装備移転や共同開発に向けたニーズの発掘や調整を行っています。私は南アジア、中東、アフリカ、中南米を担当する班に所属しており、班内総括業務に加え、他国との政府間協議や防衛産業イベント等の調整業務に従事しています。担当国の防衛産業フォーラムを開催した際は、主担当として先方の訪日プログラムの企画から大使館や参加企業との調整まで担い、相手国の大使館高官から感謝の言葉をいただきました。

2025年に開催された防衛・セキュリティ総合展示会『DSEI JAPAN 2025』では、我が国の装備品や技術力を発信するとともに、各国の政府関係者や防衛産業関係者から関心事項について直接情報収集もできました。私の担当する国からも代表団が参加していたため、展示ブース訪問や協議等の調整業務も担当しました。防衛装備移転の



実現に向けて協力可能性のある分野を特定し、案件を具体化していく協議に携われたことに加え、我が国の装備品や技術力が他国で評価されていると実感できたことは、装備系技官としての大きな喜びでした。

“ここでしかできない業務”に携わる

“当たり前の暮らし”を守る仕事に携わりたいという思いが、私が防衛省への入省を決めた理由でした。我が国の安全保障と防衛に関する“ここでしかできない業務”に日々携われていることに、やりがいを感じています。

装備系は、理系の知識や専門性を活かすことで最先端技術と装備行政の橋渡し役として幅広い分野で活躍できる点が魅力です。現在の部署では、大学時代の専攻だけでなく様々な分野の装備品や技術と関わる機会も多く、日々学び新たな知識を吸収しながら取り組んでいます。こうした業務に少しでも関心をお持ちの方の挑戦を心よりお待ちしております。

防衛装備移転実現に向け政府間協議等の調整業務に従事する

Keyword

我が国の防衛上必要な能力・機能を整備、
防衛施設のグランドデザイン、サイバーセキュリティの確保

10年後に持つべき 防衛力の姿を構想

防衛計画課は我が国に対する武力行使を抑止し、抑止が破れた場合には脅威に対処できる自衛隊をつくることを使命としています。そのため従来の考え方や伝統にとらわれることなく、「真に必要な防衛力とは何か」を常に問い続けながら、国家防衛の根幹を担う防衛力整備に取り組んでいます。

私は海上自衛隊が10年後に持つべき防衛力の姿を構想し、実現するために毎年度の予算編成業務に携わっています。昨年、AIを活用した無人機が防衛分野で活用される等変化の激しい技術趨勢の下、装備系としての技術的知見を活かして新たな技術や戦い方について運用者たる海上自衛隊のニーズを的確に理解し、予算編成においては国民の方々へ明快な説明を実践することで、所属部署の目標達成に貢献しています。

また、近年高度化する他国のミサイル技術に対処するイージス・システム搭載艦を整備するため、防衛装備庁のプロジェクトマネージャーや海上幕僚監部の関係者と連携し、主に毎年度の予算編成業務を通じた事業監理に貢献しています。装備系としてプロジェクト管理や米国有償援助調達制度等に携わってきた経験、入省後に米国で学んだエンジニアリングマネジメントの知識等を総動員し、目標時期までの就役を目指して尽力しています。

整備計画局 防衛計画課
防衛部員

2019年入省／技術系（装備系）



我が国を守るという 軸は決してぶれない

私は弾道ミサイル防衛や戦闘機開発に関するプロジェクトに携わることを志して入省し、これまでイージス・システム搭載艦の整備や次期戦闘機のプロジェクト管理を所掌する部署で勤務してきました。担当業務は予算編成、プロジェクト管理、調達制度の企画及び調達実務と多岐にわたりましたが、いずれにおいても防衛装備品という軸を一貫して持ちつつ、各部署で自身に与えられた役割を完遂してきました。我が国の安全保障戦略や防衛戦略の達成に貢献できることが大きな喜びです。



中長期的な将来を見据えて 真に必要なとされる 防衛力の整備に取り組む



全国の自衛隊施設の 整備を通じ 防衛力の基盤を確保する

大規模で困難なプロジェクト にも携わりながら成長

施設整備課では、自衛隊の活動の基盤となる全国の自衛隊施設の整備などの業務を行っています。一言で自衛隊施設といっても、飛行場や港湾施設、火薬庫、格納庫、教育・訓練施設、さらには隊員が勤務・生活する庁舎・隊舎・厚生施設など、多岐にわたります。我が国を取り巻く安全保障環境が一層厳しさを増す中、こうした多種多様な施設を着実に整備していくことは、防衛力の基盤を確保する上で欠かせません。私は特に施設数の多い陸上自衛隊の整備を担当し、各プロジェクトの進捗や予算を管理しています。事業を着実に進めるため、地方防衛局や陸上幕僚監部と緊密に連携しながら業務に取り組んでいます。

自衛隊施設の整備では、土木工学の専門知識に加え、関係者への分かりやすい説明、予算・契約制度や法令の理解、調整力など多様な力が求められます。幅広い知識や対応力が必要であるため新しい学びや経験を得ることができ、自らの成長につながっていると感じています。

整備計画局 施設整備課 整備第1班
整備第1係長

2020年入省／技術系（施設系）

2025年に開設された佐賀駐屯地の建設プロジェクトは、特に強く心に残っています。このプロジェクトは、駐機場や格納庫、隊庁舎など多数の施設を極めて短期間で整備する必要がある困難な事業でした。完成時には建設技術者としての達成感に加え、日本の安全保障に貢献できたことを実感しました。

土木の専門性を活かして 日本の安全保障に貢献

大学で土木工学を学んだ私は、専門性を活かせる進路を模索する中で、防衛省の「防衛技官」という職種を知りました。土木の技術者という立場から我が国の平和と安全を支えることに魅力を感じ、施設系技官を志望しました。また、説明会や官庁訪問で出会った先輩職員の誠実な姿勢に共感したことも入省の動機となりました。

防衛施設の整備では、新たな駐屯地の建設や火薬庫・格納庫の整備といった大規模プロジェクトに携わることができます。困難に直面してもチームワークで乗り越えていく経験は、大きなやりがいに通じます。専門性を活かして日本の安全保障に貢献したいという志を持つ皆さんの入省を、心よりお待ちしております。



Keyword

防衛施設と周辺地域との調和、地域コミュニティとの連携、在日米軍の駐留を支えるための施策の実施、環境問題・気候変動問題への対応



地方協力局 総務課
総括班長

2012年入省／事務系

ている住民の方々がいらっしゃることを決して忘れてはいけません。住民の皆様の生活を常に念頭に置き、自衛隊や米軍の活動に伴う騒音や環境問題といった課題にもしっかりと対処していくことを意識しています。自衛隊や在日米軍が地域に根差し、ご理解とご協力を得られるよう、日々試行錯誤を重ねながら地道な調整を進めています。

最後の砦として 守り抜く

私は、この国と国民を守り抜くという不変の使命に強く共感し、防衛省に入省しました。刻々と変化する安全保障環境の中、私たちのミッションは多様化・複雑化していますが、どのような事態が発生しても「最後の砦」として国民を守り抜くという私たちの軸が揺らぐことは決してありません。

防衛省では、自衛官・事務官・技官などの様々な職種がそれぞれの知見を活かしながら、日々、困難な課題に一丸となって立ち向かっています。熱い思いを持った皆さんとこの使命を共に担える日を、心から楽しみにしています。



自衛隊施設整備の 大規模プロジェクトに携わる

私が所属する地方協力課は、主に、自衛隊の基地や在日米軍施設・区域が所在する地元自治体からの協力を得るための全体調整を担っております。自衛隊・米軍が活動する上で地元の協力は必要不可欠である一方、これらの活動が地域住民の生活に大きな影響を与える可能性は否定できません。例えば航空機が飛行すれば飛行場周辺には騒音が生じ、海上において訓練を行えばそこでの漁業は制限される可能性があります。そのため活動に際しては地元に向けて丁寧に説明を行うとともに、必要に応じて防音工事や漁業補償などの対応も行います。

私の所属する部署で最も大きなプロジェクトは、鹿児島県の種子島沖合の馬毛島(まげしま)における自衛隊施設の整備です。このプロジェクトには、我が国の南西地域において自衛隊の訓練施設・緊急時の活動場所を整備する点、米国の空母艦載機着陸訓練のための恒久的な施設を確保する点の

地方協力局 地方協力課
企画調整官

2003年入省／技術系(施設系)

2つの意義があります。これらを踏まえて現在滑走路など飛行場施設等の大規模な工事が進められており、その円滑な進行のために地元の方々から協力・理解が得られるよう、努力しているところです。

専門性の枠を超えた 幅広いフィールドで活躍

私は大学時代に機械工学を専攻し、メーカーへの就職を考えておりました。しかし、我が国の安全保障の議論やそれを所掌する防衛庁(当時)の業務に関する話題が高まっており、私も強い関心を抱くようになりました。そして技術者としての自分の強みを活かすことでこの分野に携われることを知り、入省を志望しました。

防衛省で働いて感じる醍醐味は、本当に多様な業務に携われることです。大規模なプロジェクトの現場に参画でき、我が国の安全保障の企画立案という政策の議論にも加われます。技術者としての枠に留まらない幅広いフィールドで活躍できることは、大きな魅力です。



我が国の安全のため
地元の協力・理解を
確かなものにしていく

調整業務に取り組む
部隊配備や施設整備、訓練実現へ
地元住民の皆様を思いつつ

国民・自衛隊・米軍の 架け橋に

安全保障環境が厳しさを増す中、防衛力の抜本的強化や日米同盟の抑止力・対処力の強化を迅速に進めていく必要があります。私の所属する地方協力局は、このための新たな部隊配備や施設整備、より実践的な訓練などを実現させるにあたり、地元住民の皆様からご理解とご協力を得るための調整を担っています。我が国の平和と安全のため、自衛隊及び在日米軍の活動基盤を安定的に確保しつつ、地元の負担軽減に着実に取り組み、国民・自衛隊・米軍の三者の架け橋となることが、「地元調整のプロ」が集まる地方協力局のミッションです。

具体的には、2025年7月にオスプレイを配備する佐賀駐屯地を新設したほか、スタンド・オフ・ミサイルの配備や呉地区における多機能な複合防衛拠点の整備など、防衛力抜本的強化に向けた新たな施策を実現するための調整を全国各地で着実に進めています。一方で、そこには平穏に生活され

Keyword

自衛官の処遇改善、生活・勤務環境の改善、
女性の活躍推進、隊員の家族支援



ミッションは 自衛隊員を守ること

「人は石垣、人は城」——武田信玄の言葉が示す通り、国防を担う人材は国家の根幹を支える極めて重要な存在です。現在も約25万人の自衛隊員が、全国各地で、国防という揺るぎないミッションに日々正面から向き合っています。戦後最も厳しい安全保障環境に直面する今、我が国の防衛力を抜本的に強化してこの困難なミッションを達成するために、担い手の確保や育成、勤務環境整備に関する政策の舵取りを担うのが人事教育局です。局内の職員とも議論を重ね、局のミッションとして「国民を守るのは自衛隊員であり、自衛隊員とご家族を守ることが人事教育局である」を掲げました。自衛隊員が国防という崇高な任務に誇りと名誉をもって専念できるよう、処遇改善、生活・勤務環境の改善及び新たな生涯設計の確立に全力を挙げて取り組んでいます。局長である私はこれら施策の実現に向けて組織全体の舵取りを担うとともに、時にはフロントラインに立ち、総理大臣への説明や国会の委員会で答弁することもあ

人事教育局
局長

1990年入省／事務系

ります。国の安全保障に関わる政策について現場の声を踏まえながら企画立案し、それを社会に届ける。とても重要な役割であり、日々やりがいを感じています。

国を守ることへの 熱い思いは不変

私が防衛庁（当時）に入庁したのは、バブル経済の絶頂期でした。物質的な豊かさや利益追求が重視される時代にあって私は「制度や仕組みを通じて、社会全体のために働きたい」という思いを抱き、この道を選びました。入庁式が終わり、最初に執務室に入った際に先輩職員から感じた熱気を鮮明に覚えています。あれから30年以上経った今、防衛省が果たすべき役割は時代とともに大きく広がり、私自身もその変化を肌で感じてきました。こうしたダイナミックな時代の変化の中で、入庁式直後に感じた熱気は、いまもここ市ヶ谷で変わらず受け継がれています。このパンフレットをご覧になっている皆さんは、無限の可能性を秘めています。防衛省は、その可能性を十分に発揮できる舞台です。皆さんと共に働けることを心から楽しみにしています。



国防を担う人材が 誇りと名誉を胸に 任務に専念するために



人事教育局 人事計画・補任課
補任第1班長

2016年入省／事務系

格制度の企画業務を担当しています。

多くの自衛官は50代で定年を迎え、ほとんどが民間企業に再就職します。その際、自衛隊で得た技能を活かすことができれば、人手不足に悩む社会全体にとっても有益です。私が担当する自衛隊のパイロットや航空機整備などの資格制度は任務や機体の性質上、民間の資格とは異なりますが、任務で培った技能そのものは民間でも必ず有用です。現在は自衛隊での資格・経験をもとに退職後の民間資格取得を円滑にし、再就職につなげる制度設計を関係省庁や現場部隊とともに進めており、自衛官のため、自衛隊全体のため、そして社会のため、人事施策を通じた日本への貢献を続けています。

自分に胸を張れる 仕事をしていきたい

入省当時、「10年後、20年後、自分に胸を張れる仕事をしたい。防衛省ならどの仕事でも国防につながっていることを感じられるはず」と考えていたことを思い出します。入省して約10年が経ち、初めて人事教育局に配属され、国防というマターの切り口の豊富さを改めて感じます。「人」にフォーカスして、一人ひとりが高いパフォーマンスを発揮する状況を整え、組織として最大の成果を得ることで防衛力の強化につなげていく今の仕事は、まさに自分に胸を張れる仕事であることを自覚します。私は入省して後悔はありません。学生の皆さん、防衛省、おすすめです。

自衛官の再就職に つながる道を拓く

我が国の行政・立法・司法部門で働く国家公務員約59万人のうち、実は、40%超（定員約25万人）が自衛官で占められています。その自衛官の人事制度は、任務や勤務形態の特殊性から、他の公務員と異なる点特徴です。私が勤務する人事教育局はこうした大所帯の自衛官を対象とした独自の人事制度を所管し、人手不足や働き方への認識の変化といった社会情勢を踏まえ、いかに質の高い人材を確保するか、個々人のパフォーマンスをどう向上させるかといった観点から幅広い政策を展開しています。その中で私は、高位の幹部自衛官の人事や、パイロット資格のような任務に必要な各種資



人事施策を通じ 日本社会全体に 貢献したい

第二線の部隊へ 最適な航空戦力を 届けるために

英伊との次期戦闘機の 共同開発に取り組む

防衛装備品は、国家の意思と能力を示し抑止力と対処力の根幹を成し、他国と数十年に及んで関係を深める上でも大きな役割を果たす。さらに、その開発・生産等は社会経済にも影響を及ぼす。

私の部署は、陸海空自衛隊の部隊に航空戦力を適切なコストで適時に届けることが使命。そのために世界と日本の航空機産業の特殊性を踏まえ、自衛隊の開発・運用するすべての航空機の性能、コスト、スケジュール等のリスクに対して部隊や企業とともに対処する。実際にモノを作り・管理しているからこそ、物理的な制約を大きく受ける。陸海空自衛官、研究職といった、バックグラウンドの異なる職員とともに、その成果を最大化させることが私の任務。より良いモノを効率的に開発・調達・能力向上・維持整備することと、国内の社会経済と国際関係により良い影響をもたらすこと、これらの最適なバランスを追求し、カタチにし続けることが求められている。



特に最先端の技術を持ち寄って行われている英伊との次期戦闘機の共同開発は、日本が米国以外で行う初めての大型共同開発プロジェクト。連携する無人機の開発とあわせ、広い産業的裾野を持つ日本の航空機産業の未来に対する責任を強く感じる。

新しい仲間とともに 日本の歴史を繋ぎたい

国家・政府・国力とは何か、国民が組織的に命を賭して守るものとは何か、平和はいかにして創り・守られるか——このような問いに当事者として向き合いたい人は、活躍の場として、防衛省が向いている。国家としての「力」の在り方を模索しカタチにしていく防衛省での業務は、我が国が国際社会で取り得る政策の幅を直接的に規定している。

各国がしのぎを削る秘匿性の高い国防という分野で、政策を実現していく助けとなるのは、業務を通じて構築される経験と仲間だ。思い切って身を投じるに値する場所であることは間違いない。新たな仲間を待っている。

防衛装備庁 プロジェクト管理部
事業監理官(航空機担当・次期戦闘機担当) 付
事業監理官補佐

2010年入省／事務系



防衛装備庁 装備政策部 装備政策課
主任

2022年入省／技術系(装備系)

防衛事業に取り組む 中小企業の支えに

装備政策課は、防衛装備品の開発・生産・運用を支える防衛生産・技術基盤の維持・強化に取り組んでいます。その中で私が所属する戦略・制度班では、装備行政に関する戦略や制度の企画・立案を担っています。現在、特に力を入れているのが、防衛産業の中長期的な望ましい方向性を示す戦略文書の策定です。検討すべき事項が多岐にわたるためチーム全体で臨機応変に対応する必要があります。柔軟性と協調性をもって取り組んでいます。

また、私が担当している業務の一つに、「装備品製造等基盤強化資金」に係る認定業務があります。防衛関連の事業は企業にとって利益が出にくく、投資が進みにくいという課題があるため、防衛事業に取り組む中小企業のために長期融資制度が設けられています。その認定に際しては企業の事業や技術の内容を理解する必要があり、私の理系のバックグラウンドを活かせる場面も多くあります。



さらに現在は、無人機の国内生産基盤の構築に係る検討にも携っており、その第一歩として、企業へのヒアリングを通じた情報収集を進めているところです。これら多岐にわたる業務を通じて、防衛産業の基盤強化に貢献できることに、大きなやりがいを感じています。

理系としての総合力を 発揮しながら

私が防衛省に入省したきっかけは、理系の知識を活かして、日々変化する日本の安全保障環境を支えたいと考えたことでした。装備系は理系としての知識や経験を幅広く活かせる職種であるとともに、学生時代には学ぶ機会がなかった新しい分野に関われることも魅力です。

防衛や装備行政と聞くと堅いイメージを持つ方もいるかもしれませんが、職場では柔軟な発想やチームワークが求められ、若手も積極的に意見を述べています。少しでも興味がわいたら、ぜひ説明会等に参加してみてください。

防衛産業の 中長期的な方向性を示す 戦略文書の策定に取り組む

防衛技官の役割

我が国の平和は、全国に約25万人いる自衛隊員と、この巨大な組織を運用するための仕組みだけでは実現できません。自衛隊の活動は、駐屯地・基地等の「防衛施設」や、戦闘機・艦船・戦車等の「防衛装備品」といった物的基盤があってこそ実現されます。この防衛省特有の多種多様な物的基盤を支えているのが、理系の専門性を活かして防衛政策に携わる防衛技官です。我が国の平和と独立を守るという唯一無二のフィールドで、技術力で貢献する責任感を胸に日々取り組んでいます。

防衛技官の職務

01

施設系技官

平和という「究極のインフラ（社会基盤）」を整備する

駐屯地・港湾・飛行場等の「防衛施設」は、自衛隊の活動基盤であり、国民の当たり前の毎日を明日につなぐ「最後の砦」として必須です。施設系技官は、土木・建築・機械・電気などの工学系出身の職員が、技術的知見を活かして、強靱な防衛施設の確実な整備（建設）や安定的な運用に必要な政策の企画・立案を行っています。

防衛施設の整備（建設）

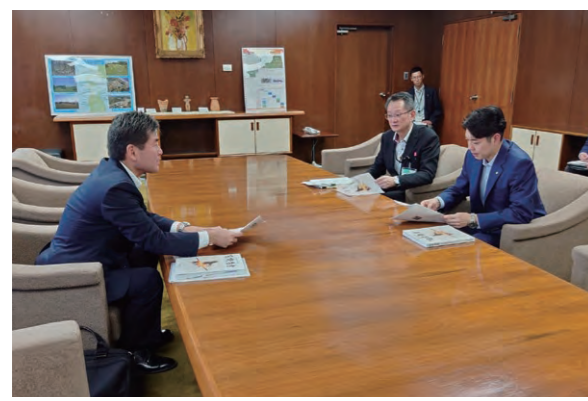


駐屯地の新設／石垣駐屯地



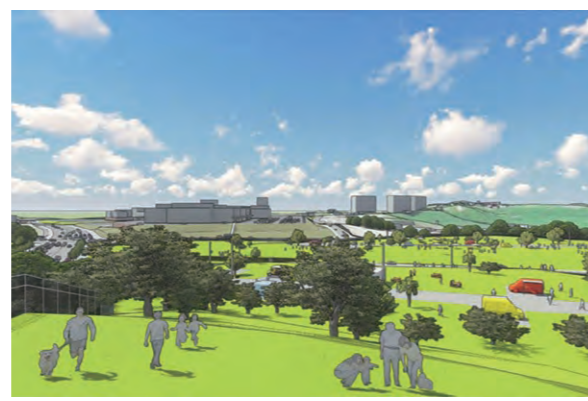
抗たん性の向上／実爆実験

周辺地域との調和



自治体への防衛政策の説明

在日米軍の再編



在日米軍の再編／ロウワー・プラザ地区緑地公園（イメージ）

働く場所



キャリアパス

入省1年目は、本省内部部局等において行政官として実務を経験します。2年目以降、地方防衛局等の勤務を交えながら専門的技術力と行政感覚をバランスよく培います。その後、他省庁の課長補佐に相当する「防衛部員」となり、自らのイニシアチブで政策の企画・立案を行うこととなります。また、海外・国内留学や出向、海外勤務など多様な経験を積むことが可能です。

防衛技官の職務

02

装備系技官

戦略的な「装備政策」を展開する

戦闘機・艦船・戦車等の「防衛装備品」は、自衛隊の能力発揮の根幹です。装備系技官は、技術的な知見を背景に、装備品等に係る各種政策の企画・立案などを担っています。様々な知識を柔軟に活用して、装備品の取得、防衛生産・技術基盤の維持・強化、国際装備協力などに携わります。

装備品の取得



プロジェクト管理、契約制度の見直し 等



防衛生産・技術基盤の維持・強化



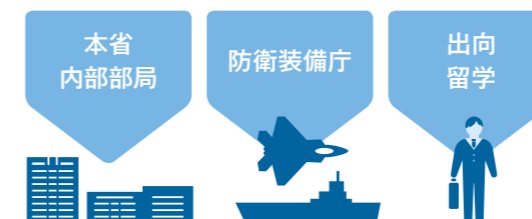
防衛事業の魅力化、強靱なサプライチェーンの構築 等

国際装備・技術協力



防衛装備移転の推進、国際共同研究開発 等

働く場所



キャリアパス

入省1年目は、本省内部部局等において行政官として実務を経験します。2年目以降、本省内部部局や防衛装備庁において装備品に関する政策や専門的な知識を活用する実務経験を積みながら行政感覚を養います。その後、他省庁の課長補佐に相当する「防衛部員」となり、自らのイニシアチブで政策の企画・立案を行うこととなります。また、海外・国内留学や出向、海外勤務など多様な経験を積むことが可能です。



整備計画局 施設計画課 施設政策室
防衛部員

2013年入省／技術系（施設系）

全国の自衛隊施設を 強くする

施設系技官の主な仕事は自衛隊施設や米軍施設の整備ですが、その施設整備の計画から完成までの一連のプロセスには、省内の様々な部署が関係しています。それらの部署はまとめて「施設グループ」と表現され、大きなミッションの一つに「自衛隊施設の強靱化」というものがあります。文字通り、全国の自衛隊施設を強くしようとするものです。全国に約2万3千棟あると言われる自衛隊施設を時代に合わせすべて強靱化するには膨大な予算と人員が必要であり、その予算の調整や職員枠の増設等、実現に向けた新たな政策立案に携わっているのが私の所属する施設政策室です。その中で私が担当している業務は、自衛隊施設整備におけるPFI事業（民間資金等活用事業）の導入と、施設整備を担う技官を中心とした職員枠の増設等です。PFI事業は自衛隊の施設整備では事例が非常に少なく、今後民間の力を活用していくことで膨大な数の自衛隊施設の強靱化をより効率的に実現できるのではと考え、実現可能性につい



て様々な基地・駐屯地で検討しています。また、職員枠増設の検討もやりがいのある仕事で、全国でどういった工事があるのか、将来の業務量とは、広い視野で組織を見ることができるといえます。その上でどこに人手が足りないのか、PFI事業による民間力の必要性はあるかといった観点で、将来の働き方を考えています。

業務の幅広さが 大きな魅力

私が防衛省を志したきっかけは、格好いい自衛隊施設を整備してみたい、ニュースで目にする大きなプロジェクトに携わってみたいといったことでした。しかし実際の施設系技官の仕事は、現場で施設を完成させるだけではありません。業務の幅は広く、その時々で魅力を感じる業務も様々です。私の場合、今は個別の施設の計画を通して部隊の様々な運用を知ることができることに魅力を感じています。このように入省から10年以上経っても新しい発見が得られる仕事ですので、好奇心旺盛な方にこそふさわしい仕事だと思います。

自衛隊施設の 強靱化を実現するために 新たな政策立案を担う

南西地域の離島で 自衛隊の活動・訓練拠点の 整備事業を進める

現地にも足しげく 通いながら

広大な南西地域は自衛隊の活動・訓練拠点が乏しく、この空白状況を補う必要があります。そこで私の所属部署では、鹿児島県の種子島沖合に位置する馬毛島（まげしま）という、社会インフラが整っていない離島の広大な土地を使い、自衛隊施設の整備事業を実施しています。2本の滑走路や管制塔、燃料タンク、港湾施設をはじめ、F-35Bが模擬艦艇への離着陸を訓練できる施設等を一挙に新設するという、我が国においては比類なき大規模プロジェクトです。私は、この特殊な施工条件の中でも計画通りに自衛隊施設を運用開始できるよう、関係省庁や自衛隊、米軍とも頻りに打ち合わせを行いながら、合理的な事業の実施計画を立案しています。また、馬毛島へも足しげく通って進捗状況の把握や課題解決等も行っていきます。自分の目で現地状況を把握している強みを活かすことで関係者に現地状況や今後の見通しを分かりやすく説明す



ると同時に、本省の視点で現地レベルの調整ができることに、自らの手で事業を前進させている実感が得られます。

変化する安全保障環境に 適応するために

私は「誰かがつくりだした平和を享受するのではなく、自分ごととして国防を担って平和を守り抜きたい」との思いで入省し、これまでの様々な職務を通じて、その思いは一層強くなっています。

防衛施設は一朝一夕には完成しませんが、目まぐるしく変化する安全保障環境に常に適応し続ける必要があります。インフラは維持管理の時代といわれる中、防衛施設行政においては時勢に基づき今後必要とされる施設を整備し続けています。現状維持ではないからこそ、時には困難な場面もあるかもしれませんが、「他の誰でもなく自分こそがやるんだ！」と心から思える仕事ができます。同じ志を持った皆さんと一緒に仕事ができる日を楽しみにしています。



整備計画局 提供施設計画官付
調整係長

2019年入省／技術系（施設系）



防衛装備庁 調達管理部 調達企画課
総括班長

2013年入省／技術系（装備系）

伴う調達業務の増加に対応するため、現在は調達関連部署の体制整備を進めています。

防衛生産・技術基盤の強化や外国への防衛装備移転、物価上昇への対応など、近年の防衛装備行政における課題に対して、調達が果たす役割は大きくなる一方です。こうした課題に対して契約制度の面からアプローチを行い、日本の安全保障の実現に寄与しています。

ビジネス感覚を活かして 防衛産業と向き合う

私は学生の頃、少ない予算をやりくりしながらインドや中国へ旅行しました。この旅行の経験を通じて、安全保障に興味を持ったことがきっかけで、防衛省の仕事に関心を持ちました。防衛装備行政には、一般ビジネスの感覚をもって防衛産業と対話していくことが求められ、入省前の印象は良い意味で覆されました。このギャップからMBA留学を経験しそこでの学びを日々の業務に活かしています。非常にチャレンジングで、やりがいがある仕事です。



あらゆる宇宙政策や 宇宙システムに携わる

戦略企画参事官付は宇宙、海洋、統合防衛ミサイル防衛、拡大抑止、将来技術といった中長期的な視点で取り組むべき防衛政策の企画・立案を担っています。その中で私が担当しているのは、宇宙政策の企画・立案や宇宙システムの開発・実証事業です。

GPSや衛星通信をはじめとした宇宙空間の利用は国民生活に浸透しており、防衛省・自衛隊としても宇宙領域における防衛能力の構築・強化を進めています。令和8年度には航空宇宙自衛隊（仮称）への改編も予定しており、防衛省・自衛隊は宇宙分野を牽引する世界有数の組織かつ国内最大のユーザー機関です。

防衛省では、宇宙領域における防衛能力の強化に必要な能力や技術等を明らかにした「宇宙領域防衛指針」を令和7年度に策定しましたが、私はゼロから策定に携わりました。また、宇宙領域防衛指針で示した各種能力を具体化するために民間企業とも

防衛政策局 戦略企画参事官付
調整係長

2020年入省／技術系（装備系）

連携し、超小型衛星から大型静止衛星、ロケットエンジン、地上システムといったあらゆる宇宙システムの開発・実証事業にも携わっています。大局的な構想策定から専門的な技術検討まで一貫して携われることは、大きなやりがいを感じています。

キャリアを通じて 成長できる環境

私は、安全保障環境が厳しさを増す中、技術的知見を活かしつつ政策による課題解決を通じて日本の平和維持に貢献したいと思い、防衛省に入省しました。

防衛省・自衛隊が取り扱う装備品は多種多様であり、装備品に関する政策は自衛隊の活動に大きな影響を与えます。政策や技術に関する専門性が求められるため、省内には充実した研修が整っていることに加え、宇宙分野においてはJAXA等との連携事業や人事交流を通じて最先端技術を深く学ぶこともできます。こうして得られた知見によって自分自身の世界を広げられることも、防衛省で働く魅力の一つです。



宇宙領域を舞台に
世界トップクラスの機関として
防衛能力の構築・強化に挑む

防衛装備品の
調達を通じて
安全保障に貢献する

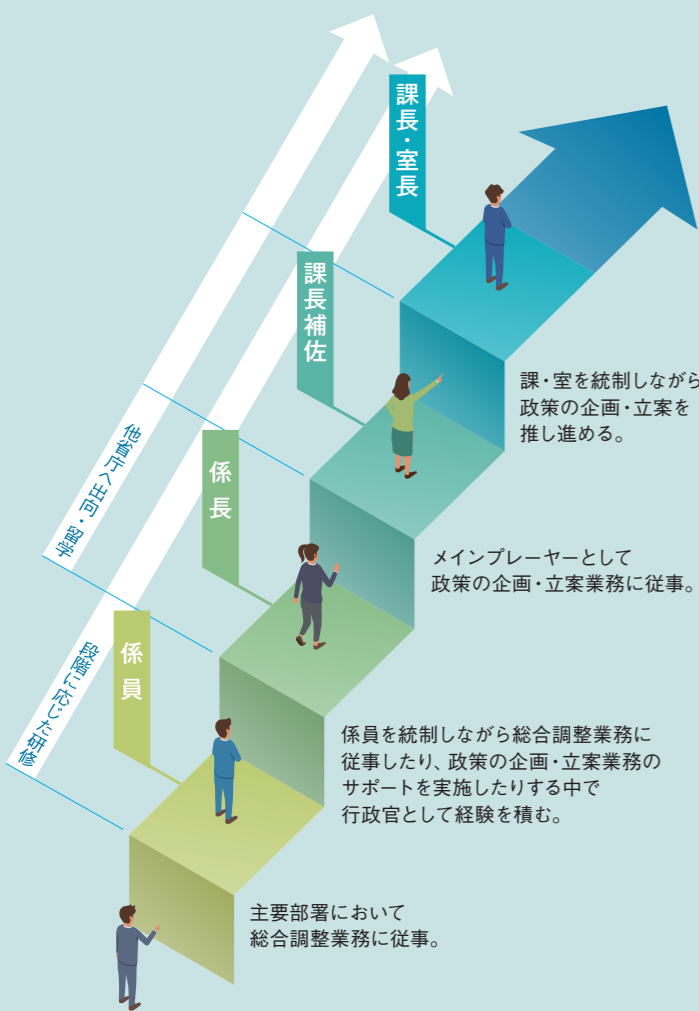
格段に増加した 防衛装備品の調達

航空機や艦船、誘導武器などの防衛装備品の多くは複雑なシステムで構成されており、高額かつ複数年の製造期間を要します。日々の生活における買い物と大きく異なることは容易に想像できるでしょう。こうした防衛装備品の調達では、品質・コスト・納期に関する要求に加え、公平性・透明性の確保や会計法令の遵守など、多方面の要請に応える必要があります。私の所属する調達企画課は、こうした防衛装備品の調達に関する政策・制度の企画立案、業務全般のとりまとめを担う中核的な部署です。その中で私は総括班長として、課内横断的な業務の統括や、国会対応などの対外的な業務を担当しています。

2022年に策定された戦略3文書を受け、防衛装備品の調達は格段に増加しました。2024年度の調達額は約7.6兆円にも上り、戦略3文書策定前と比較して、約3倍に達しています。こうした防衛力の抜本的強化に

総合職の キャリアパス

入省後から、研修や様々な業務があり、成長の機会が多くあります。徐々にキャリアアップをして、政策の企画・立案を自ら主導する役割を担います。



※一般的なキャリアパスを分かりやすく模式化したものです。

世界で活躍する職員からのメッセージ

防衛省では、国内外のさまざまな勤務地や関連機関で活躍する職員がいます。さらに、専門知識を深めたり、知見を広げるために国内外へ留学している職員も数多く在籍しています。職員たちからのメッセージをご紹介します。

海外留学 Toulouse / France

トゥールーズキャピトル大学

2019年入省／事務系

現在、私はフランス南部のトゥールーズという都市でフランス及び欧州の安全保障史や地政学を学んでいます。授業や現地学生との議論から得た知見を入省以来の経験に肉付けしていく中で、安全保障という分野の重要性や奥深さを改めて感じつつ、今後いかに我が国の安全保障体制を構築していくべきか思索を巡らせる日々です。



海外留学 London / U.K.

ロンドン大学SOAS

2021年入省／技術系(施設系)

現在、英国ロンドン大学SOAS(東洋アフリカ研究学院)修士課程に在籍し、国際関係学や外交学を中心に学んでいます。今回の留学で学術的な視座を養い、業務を通して得られた知見とともに、現在の安全保障環境や防衛外交政策について考察を深め、今後の勤務の中で還元できるような人材に成長できるよう、日々尽力しています。



部隊研修 Hiroshima / Japan

広島・海上自衛隊呉地方総監部

防衛部 第3幕僚室 企画調整専門官

2023年入省／事務系

私は現在、呉で海上自衛隊の現場を体感している。運用や調達、地元調整の現場を自分の目で見て、話を聞き、時として自分で体を動かし、市ヶ谷では味わえない生々しさを体感することは地方勤務の醍醐味である。これらの経験は、政策を立案する際に地方に思いを馳せることにつながり、実行性のある防衛政策に資すると考える。



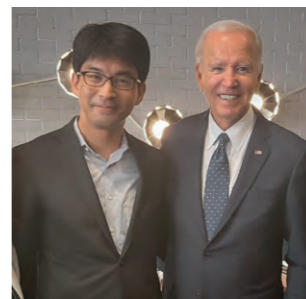
海外勤務 Washington, D.C. / U.S.A.

在米日本国大使館

参事官(政務)

2005年入省／事務系

私は2024年6月からワシントンD.C.の日本大使館で勤務しています。D.C.は政治の街であり、米国政府や議会、シンクタンク、防衛産業など、日々多くの関係者に会い、日本の考えを伝え、日米同盟のあり方についての議論を交わしています。政権交代後の米国に時に驚きつつも、同盟の最前線で刺激的な毎日を送っています。



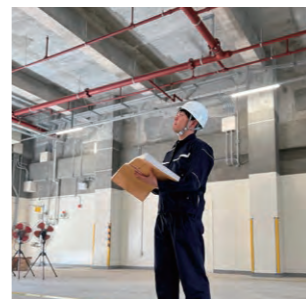
地方勤務 Okinawa / Japan

沖縄防衛局

調達部 設備課 係員

2023年入省／技術系(施設系)

厳しい安全保障環境の中、自衛隊施設の新設、改修の重要度は日々増えています。私は今、沖縄防衛局の調達部で建設工事に携っており、施設整備の最前線の現場で、文章や写真だけでは伝わらない、成果と課題を学んでいます。本場で勤務する際も、常に現場への影響を想像しながら、政策立案に取り組みたいと考えています。



出向職員 Tokyo / Japan

内閣官房

国家安全保障局 参事官補佐

2014年入省／事務系

私が出向している国家安全保障局 政策第1班は、米国などに関する外交・防衛政策について、政府内の司令塔として、総理の意思決定を支えています。防衛分野にとどまらない幅広い知見と、固定観念にとらわれない柔軟な発想が求められる上に、日々変化する情勢に即した迅速な判断を迫られる毎日に圧倒されそうになりますが、各省庁から集まったチームの力を結集し、国益を実現していく過程は極めて刺激的です。



海外勤務 Washington, D.C. / U.S.A.

防衛装備庁ワシントンD.C.事務所

防衛装備庁 調達管理部 調達企画課 有償援助調達専門官

2019年入省／技術系(装備系)

防衛省は、米国政府との契約による有償援助調達(FMS)により、自衛隊の活動に必要な最新・機密性の高い装備品を取得している反面、FMSは様々な課題を有しています。私は防衛省職員として、FMSによる装備品の取得をより円滑・適正に行えるよう、現地で米国政府との調整に日々奔走しています。



海外勤務 Omaha / U.S.A.

米陸軍工兵隊防護設計センター

整備計画局 施設整備課 防護施設研究室 調整係長

2019年入省／技術系(施設系)

米陸軍工兵隊防護設計センターで施設防護について学んでいます。施設防護とは、有事やテロの際、施設の利用者や機能を守るための技術であり、防衛施設に不可欠な要素です。こうした技術を学び、自衛隊の安定した運用に貢献し、我が国の防衛力向上に資することを常に意識し、強いやりがいと責任感を持って勤務しています。



出向職員 Tsukuba / Japan

宇宙航空研究開発機構(JAXA)

準天頂衛星システム 第一期増強プロジェクトチーム 主任

2011年入省／技術系(装備系)

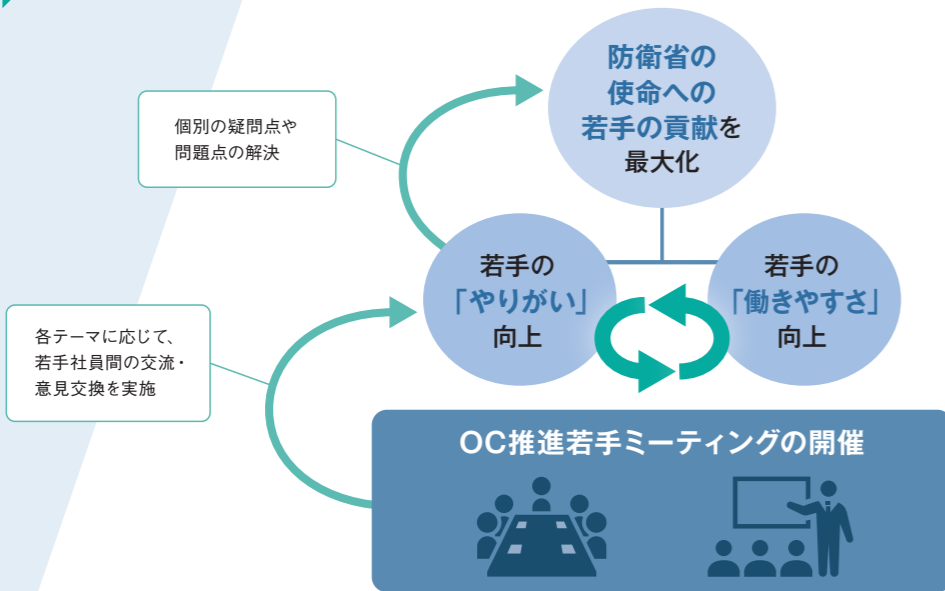
筑波宇宙センターにて、準天頂衛星「みちびき」(衛星からの電波で位置情報を得るシステムで、JAXAが内閣府から受託している事業)の開発に携っています。日常に欠かせない衛星測位ですが、私にとっては新たな分野であり、衛星開発の基本から測位技術の詳細まで、専門家に囲まれながら日々多くのことを学んでいます。



私たちが働く環境

TOPIC

自らの「働きがい」を、自らの手で。 『OC推進若手ミーティング』



OC推進若手ミーティングは、職種横断的に20人前後の1～2年目職員が参加し、自分たちの業務の「やりがい」×「働きやすさ」＝「働きがい」を向上させるための取り組みについて定期的に議論しています。

防衛省の仕事は、我が国の独立と平和

を自らの手で確保する使命の大きさが強みです。この取り組みを通じて若手職員が自発的に「働きがい」を育むことにより、防衛省の使命に対する意識を高め、組織文化に前向きな変化を生み出すことを目的に活動しています。

毎回の会議では、2年目職員を中心に、

毎回異なるテーマを設定し、活発に議論しています。

例えば、ある回では若手が担当する業務の意義や役割を改めて考え、普段の業務で生じる課題を解決するワークショップを開催しました。参加者からは、「業務を実践しながら学ぶことで、良い成長の機会になった」との声もありました。

また、入省10年目前後の先輩とキャリアや仕事への向き合い方をテーマに立食形式で交流するイベントも開催しています。参加者にとっては、地方勤務や留学、家庭との両立などリアルな経験談から自らのキャリア像をイメージする機会になっています。

普段は異なる部署で仕事をする若手職員が、様々なテーマで話し合った結果や改善策は省内で共有、実践されています。これらの活動を通して、横のつながりの深化、縦のつながりの強化が進み、より良い組織文化の構築に貢献しています。



働きがいの向上を通じ、 組織の持続的な力を高める。

防衛省において組織目標を達成するために必須の要素として、人、予算、装備、情報があると考えています。このうち、一番重要なのは、もちろん人です。

では、現状はどうでしょうか？予算は、2022年末の戦略3文書の策定に伴い、国民のご理解のもと、5年単位で約1.5倍に増えました。それに伴い、順次、装備も増えてきています。安全保障環境の悪化により、取り扱う情報も多くなっています。しかし、人は、比例して増えてはいません。むしろ、社会環境の変化など、様々な人的課題が存在しています。

防衛省の組織目標である「国防」は、いかなる課題があっても達成しないといけないものです。そこで、防衛省では、一人ひとりの「働きがい」を向上させて、より生き活きと働けるようにすることで、組織のパフォーマンスを最大化することを目指しています。

「働きがい」は、「やりがい」と「働き

やすさ」の掛け算と定義しています。

日々、安心して快適に仕事ができる「働きやすい」環境を整備するとともに、「やる気」スイッチを押して「やりがい」をもって業務に臨める環境が重要です。

防衛省では、幹部を長とする「市ヶ谷におけるより良い組織文化を実現するための推進チーム」(略称:OC (Organizational Culture) 推進チーム) を設置し、「やりがい」と「働きやすさ」の双方を向上させるアプローチをとっています。

私はこの推進チームの事務局長として、

関係部署を巻き込みながら、「働きがい」の向上に向けて、取り組んでいるところです。取り組みはまだ道半ばですが、組織が良い方向に進み始めていることを肌で実感しています。

このパンフレットをご覧のみなさんは、それぞれ、国防に貢献したいという使命感を持ち、防衛省の門を叩こうとしていることと思います。その使命感、無駄にしません。みなさんの一歩が、日本の平和を守る大きな力になります。官庁訪問でみなさんの想いを聞かせてください。



大臣官房 統括人事調整官

2003年入省／事務系

Career History

2003年▶防衛庁(当時) 入庁
2006年▶防衛政策局 調査課 調整係長
2007年～2009年▶SAIS Johns Hopkins University 留学
2012年▶大臣官房 秘書課 部員
2015年▶総理官邸総理秘書官付

2017年▶防衛政策局 戦略企画課 サイバー政策班長
2021年▶防衛政策局 防衛政策課 企画調整官
2023年▶大臣官房 参事官
2024年▶大臣官房 統括人事調整官(現職)
2025年▶国家資格キャリアコンサルタント登録



特集
3

対談

P38-39 様々な働き方ロールモデル



P40-41 若手職員アンケート

P42 ワークライフバランスを支える制度

人事教育局 人事計画・補任課
先任部員／大臣官房企画官

職員F

2006年入省／事務系

ワークライフバランスとは、自己成長のためのもの。仕事以外の経験や、防衛省外の人とのつながりも全て業務に活かしています。

仕事と育児を両立する中で大切にしたのは、量より質。時間が限られているからこそ集中力が高まり、結果的に職場全体の効率化にもつながりました。

誰かと比べず、自分のミッションに立ち返る。それが私の軸です。今は後輩から相談を受ける立場として、試行錯誤の経験を次の世代につないでいきたいと思っています。



柔軟な働き方で実現する、充実の家庭生活。



職員G Fさんは先任部員という激務をこなしながら、仕事と子育てをしっかりと両立されていますね。

職員F うまく両立できるか不安でしたが、後に続く女性のロールモデルとしても頑張りたいと上司に言われたことを覚えています。子供の迎えを夫にお願いしたり、そもそもの業務のやり方を変えて効率化を図ったりと、手探りではありましたが、何とか乗り切ってきたというのが実感です。

職員G 働き方に対する意識や制度が大きく変わったのは、やはり新型コロナウイルスのパンデミックがきっかけだったように思います。多くの職員が在宅勤務に切り替えざるを得なくなり、トライしてみたら想定以上にうまくいったことで、テレワークが定着したのではないのでしょうか。職務の特殊性もあってすべての部署でテレワークが可能というわけではありませんが、補佐官の登庁予定がない日などは可能な限りテレワークを活用しています。テレワークの日、我が家では共働きの妻が残業して、夕食の準備も含めた家事は私が担当しています。

職員F フレックスタイム制も浸透してきましたね。私は息子を保育園にお迎えに行く際に、定時が18時15分のところ、18時で退庁するために活用しています。初めてフレックスタイム制

を利用したときは、あまりの便利さに驚きました。テレワークも含め、以前よりも柔軟な働き方ができるようになったのは間違いないでしょう。

職員G 日本の政策に関わる大きな仕事に携わりながら、個人の事情に合わせた柔軟な働き方が可能なのは、防衛省ならではの魅力だと感じています。

職員F 仕事と育児の合間を縫ってしっかり休暇も楽しんでいます。プライベートでの経験や出会いが日々の業務にも生きてくることを実感しています。ワークライフバランスを充実させることは、自分の成長にもつながると思います。ワークもライフも、どちらも充実させたいという欲張りな方にどんどん入ってきて頂きたいですね。

職員G 将来についてはどのようにお考えですか。私はここ数年、海外の方と防衛産業や防衛装備品に関わる仕事をする機会が急速に増えたこともあり、将来は防衛装備品の移転などに携わる方々から頼りにされる人材を目指したいと考えています。

職員F 私は多様性に寛容な社会をつくりたい、それにより日本を強くしたいということを自分のミッションと考えています。そのためにできることを、自分の周りから一つひとつ積み重ねていきたいと思っています。



大臣官房 秘書課
防衛大臣補佐官秘書官

職員G

2012年入省／技術系（装備系）

私には娘が二人おり、育休は二度取得しました。2017年当時、装備系の男性職員では初のケース。恐る恐る相談すると「もっと取ったら？」と背中を押されました。

実際に育休に入って一番驚いたのは、自分の価値観が大きく変わったこと。社会の仕組みが、いかに“働く男性目線”でできているかを実感しました。

子育てなどを担う人への想像力が自然と身についた今、次の世代には育休が当たり前であってほしい。多様な働き方を受け入れる社会は、そこから始まると思います。



ある1日の流れ テレワーク+午後出勤+フレックス

- 07:00 起床、朝食の準備など
- 09:00 息子を保育園に送る
- 09:15 自宅でテレワーク
- 12:00 昼食をとりながら、自己啓発のオンラインセミナーを受講
- 13:00 登庁
- 18:00 フレックスタイム制度を利用して早めに退庁
保育園へ息子のお迎え
- 19:00 帰宅。夕食、入浴後、息子の寝かしつけ

ある1日の流れ 夕方テレワーク+家事担当

- 05:45 起床、朝食準備、子供の見送り
- 09:30 登庁
- 15:00 テレワークに切り替え、退庁、子供のお迎え
- 16:30 帰宅後、テレワークを開始
- 19:45 テレワーク終了
夕食の準備、入浴
- 21:30 子供の寝かしつけ

防衛省 若手職員 アンケート

入省1~2年目の若手職員に、就活時から多く聞かれる質問項目についてアンケートを実施しました!



Q 入省の決め手はなんですか?

1位 日本の安全保障に
直接関与できること **58%**

2位 防衛省職員に
惹かれて **21%**

2位 社会貢献度の
高さ **21%**

Q 入省1~2年目でやりがいを感じた 具体的なエピソードを教えてください

日米同盟の根幹に関わるような重要案件のロジ(関係課間の連絡調整、会議のセッティング等)を担当し、それが綿密な調整を経て無事成功したことを報道で確認した時です。



地方協力局 総務課
2025年入省/事務系

入省1年目の時に、自らが関係各所との調整に携わっていた国会答弁が、国会の場で総理大臣や防衛大臣に読み上げられたときに、日本の政治の一端を確実に担っているのだと感じて、責任感とやりがいを感じました。

現在の業務は、防衛施設の建設にかかわる業務であり、設計業者や施工業者と打ち合わせをしたり、実際に工事現場に行ったりと、日本を守るための施設をつくっている最中にあるということにやりがいを感じています。

自分が携わっていた案件がニュースで大々的に取り上げられた際には、「安全保障への貢献」を実感し、やりがいを感じます。最近では日米防衛相会談の様子が報じられ、改めて自分の業務内容のスケールの大きさを実感しました。

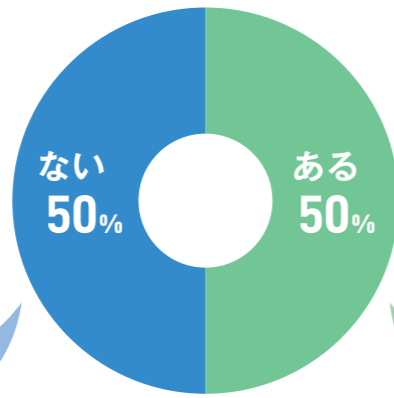
説明会や官庁訪問で感じたとおり、実際に入省してみると、親しみやすい雰囲気の職員の方が多く、同時に、真剣かつ熱い心を持って仕事に取り組む先輩方の姿に日々刺激を受けています。



ない

防衛政策局 国際政策課
2025年入省/技術系(装備系)

Q 入省前と入省後の ギャップは ありましたか?

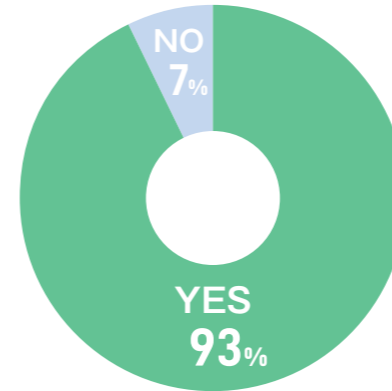


官僚というからにはどれだけ重い案件を持たされるのだろうと戦々恐々としていましたが、基本のキとなる業務から学ぶことができ、少しずつ成長する機会を与えてくれると分かったためです。また、意外と有給を取得しやすい環境には驚きました。



防衛政策局 戦略企画参事官付
2025年入省/事務系

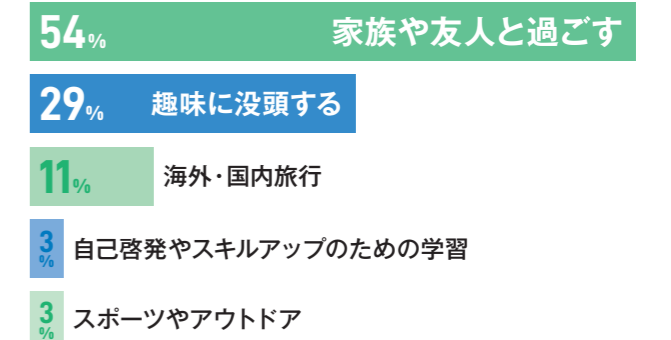
Q 仕事とプライベートの 両立はできていますか?



仕事と私生活でメリハリをつけて、どちらも充実させている人が多かったです!

繁忙期には両立が難しい時もありますが、閑散期にしっかりリフレッシュしています。

Q 主な休暇の過ごし方を 教えてください



Q 防衛省の仕事のここが面白い!を教えてください

私が所属する運用調整参事官付の担当する業務の一つに部隊訓練の調整があります。日本が同盟国・同志国と共同訓練を実施すると多くのメディアやSNSに取り上げられます。国民の関心度の高い案件に携わることができることに面白さを感じます。



安全保障政策は社会的関心を惹くものも多く、自ら携わったプロジェクトや同期が取り組んだ業務がメディアによく取り上げられます。そのたびに自分の日々の仕事、間違いなく国の根幹を形作る一端を担うものであると感じられるのが、防衛省の仕事の面白いところだと思います。



Q 職場の雰囲気を教えてください

私が所属している課では、既存の体制にとらわれず、新しいことを積極的に取り入れる風潮があり、1年目でも積極的に意見を出すことができるため、風通しが良いと思います。



防衛政策局 運用調整参事官付
2025年入省/技術系(施設系)

年次に関わらず、それぞれの得意分野を活かしてサポートし合う文化があります。自分が今まで頑張ってきた分野などで上司に質問されたり、頼ってもらえたときはとても嬉しいです。

他省庁だけでなく、JAXAや民間企業等からの出向者も多く在籍しており、幅広い属性の人と関わることができています。

もちろん自ら成長の機会を得ようとするのは当然ですが、上司は積極的に成長の機会を与えてくれると感じています。職場の雰囲気もかなり和気あいあいとしたもので、とても楽しい職場であり、業務のやり方も残業時間の短縮などワークライフバランスの実現に力を入れています。

Q 未来の後輩へのメッセージ!をお願いします

防衛省は、今、日本で一番アツい職場です。激変する国際情勢に対応し、防衛行政は日々進化しています。世界が舞台の交渉力から地元で安心をもたらす説明力まで、人間としての総合力が試される職場において、皆さんも国の平和を守るという唯一無二の任務に就いてみませんか?



日本を取り巻く安全保障環境が目まぐるしく変化する中で、自分の関わる業務が日本を守ることに繋がっていると実感できるのは、他では得難い貴重な経験であり、大きなやりがいを感じています。皆さんと一緒に仕事ができることを楽しみにしています。



ワークライフバランスを支える制度

年次休暇（20日/年）

4月1日採用の場合、採用の年は15日。
残日数は翌年に繰越（20日まで）。
時間単位で取得可能。



特別休暇

年末年始／夏季／結婚／忌引き／
人間ドック検診 等



出産に関する休暇

産前・産後特別休暇／配偶者の出産特別休暇
／妊産婦の保健指導・健康診断のための特別
休暇／妊娠中の休息・補食のための特別休暇
／通勤緩和のための特別休暇／出生サポート
（不妊治療に係る通院等）のための特別休暇



育児参加のための 休暇・休業

育児休業／育児短時間勤務／育児時間／育児
参加のための特別休暇／保育時間確保のため
の特別休暇／子の看護のための特別休暇



その他の制度

介護休暇／配偶者同行休業／フレックスタイ
ム制／テレワーク育児時間／早出遅出勤務／
超過勤務の制限 等



Column

内局職員のための 育休サポートプロジェクト ★199★

防衛省では、子育てをしながら働
くすべての職員が、不安なく育児
と仕事を両立できるよう、様々な
取り組みを実施しています。



育休中の職員向けの職場復帰セミナー・交
流会イベントに事務次官（当時）も参加

		採用実績					
		2026年	2025年	2024年	2023年	2022年	2021年
事務系	総合職（院卒者試験）	2	4	0	1	4	3
	総合職（大卒程度試験）	18	15	16	14	12	15
	合計（うち女性）	20 (9)	19 (7)	16 (6)	15 (6)	16 (6)	18 (7)
施設系	総合職（院卒者試験）	5	2	3	7	3	2
	総合職（大卒程度試験）	2	4	5	0	4	3
	合計（うち女性）	7 (2)	6 (1)	8 (2)	7 (1)	7 (1)	5 (3)
装備系	総合職（院卒者試験）	4	3	4	3	5	1
	総合職（大卒程度試験）	1	2	2	1	0	3
	合計（うち女性）	5 (1)	5 (1)	6 (1)	4 (3)	5 (2)	4 (1)

※2026年は採用見込み
※国家公務員採用試験の区分別の採用数であり最終学歴とは異なります

採用チームから皆さんへ

「激動の時代に、傍観者ではなく、当事者として自らの手で未来を紡ぎたい」

こうした思いを胸に、それぞれの場所で使命を全うする人々がいます。

「我が国の平和と独立を守り、国の安全を保つ」

この崇高な使命を担う防衛省は、いかなる状況でも、25万人の仲間一人ひとりが
決意と覚悟を持ち、この国と、誰かの大切な人を守り続けています。

世界は日々複雑化し、未来を見通すことはますます難しくなっています。
激しく変化する国際情勢、頻発する災害、科学技術の飛躍的進化、多様な価値観の交錯。

安全保障のフィールドは、陸・海・空に加え、宇宙やサイバーまで広がり、
我が国は戦後最大の試練の時を迎えています。

この激動の時代に日本の未来を切り開くために必要なのは、
先人たちから受け継いだ「決意と覚悟」を継ぐ「あなた」です。

「何気ない日常を守りたい」

「誰かの未来を守りたい」

このささやかな、しかし確かな思いが、防衛省では大きな力になります。

その使命の重さに不安を感じることもあるでしょう。

しかし私たちは決して一人ではありません。

私たちとともに歩み、日本と世界の未来を紡いで欲しい。

防衛省は、その一歩を踏み出す「あなた」の挑戦を待っています。



採用情報はこちらへ

